へ13
3948
5

門へ13
號3948
巻5

繪本三国妖婦傳下偏巻之四

目録

西狐石仙変化火を放て半信半疑教化毒に遇
左府頼長公安倍泰親を試るの圖
泰親石魂を法めて帰治の図
禽獣殺生石の毒に斃る図

殺生石教化の僧倡毒に中る圖
玄公羽和尚殺生石化度問答玉藻神社法座
玄公羽和尚藻倉殿に見參の圖
玄公羽石魂找化度する圖
玄化國宮内の左玉藻大柱現祭祀の圖

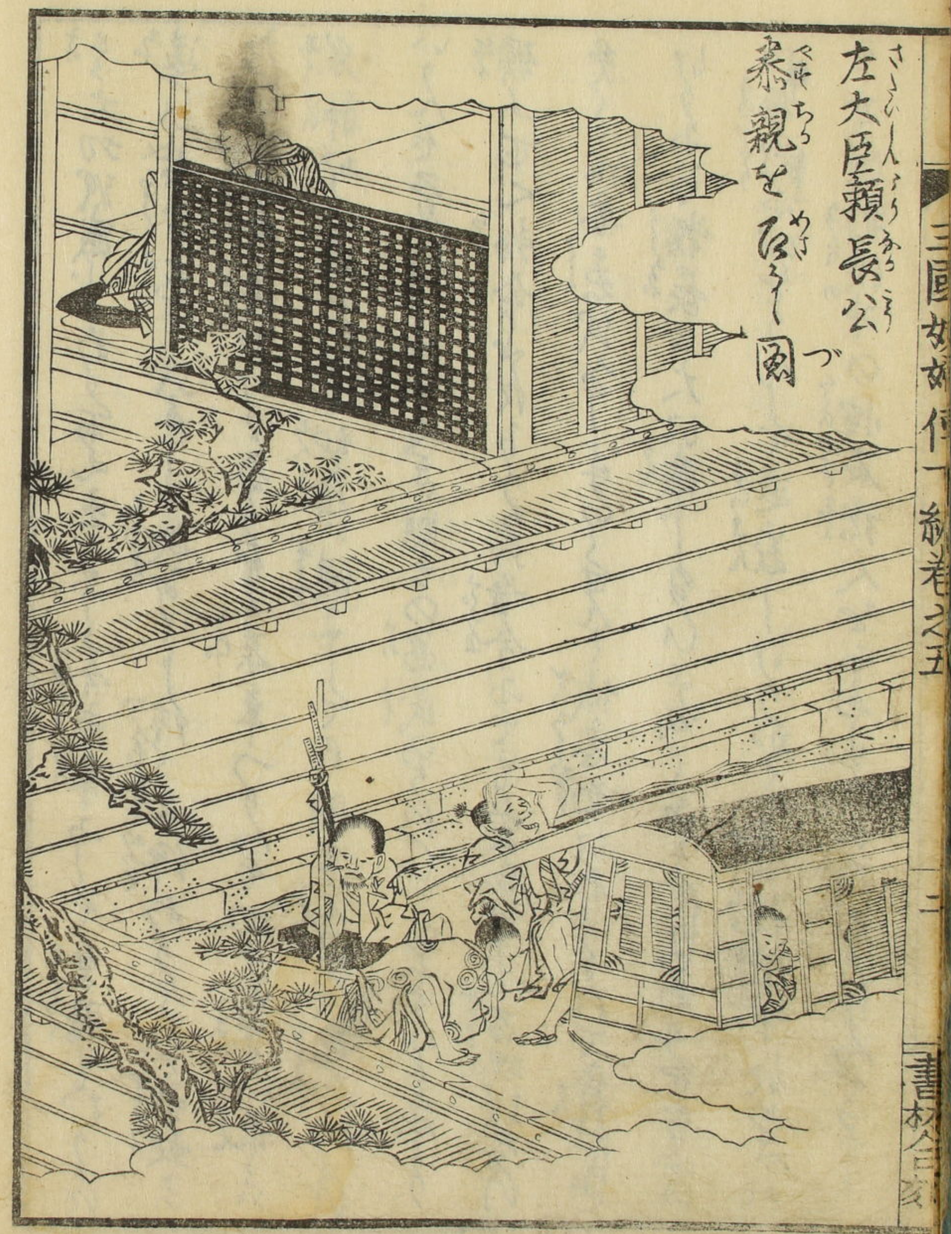
繪本三國妖婦傳下編卷之五

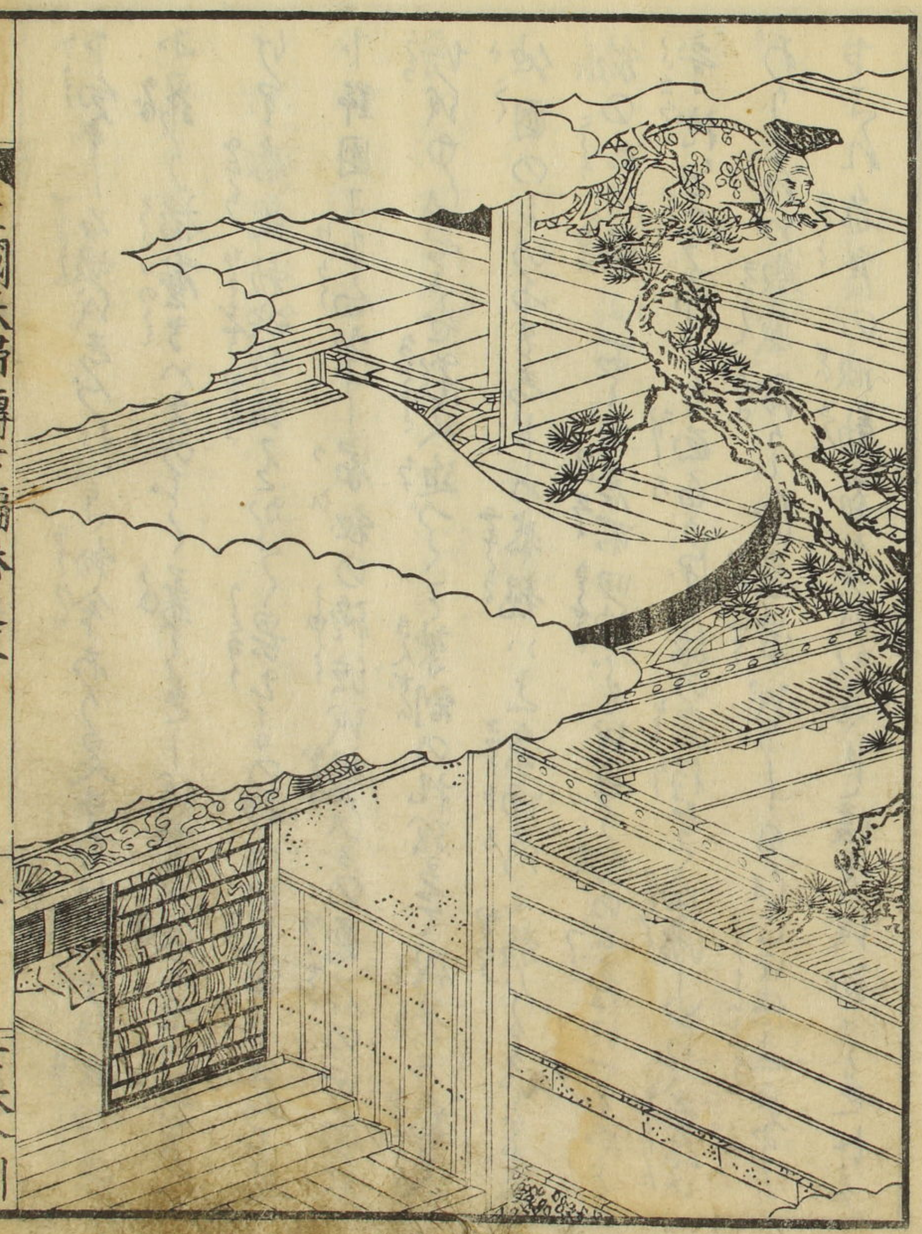
惡狐石ノ變ト災異貴僧殺生石ノ教化ニ毒ノ遇

保延七年酉年永治元年辛酉ノ冬三月十日先帝鳥羽上皇法師を崇德院出家ス法諱を空覺と稱ス同年十一月七日當今崇德院出家ス太子躰仁親王ハ位十八年ヲ經て仙洞御所に遷幸ス〳〵是を新院と稱ス太子躰仁親王ハ即位ス同年辛酉康治元年人王七十六代近衛院と申ス是なり寶ヲ寶羽法皇ハ八の皇子ヲ儲たり大臣長實ハ公の出息女に出ル男子ヲ儲ル後員福門院と申ス當今の康治元年天養久安仁平を經て久壽二年に至て十五年ハ保元ノ

十九年以来保延三年二條女院崩御廣常小勅宣ありて
下野国形須神に退治せしむる令元九尾白面の悪狐殺害せられ
石となり毒氣人を害ずるゆゑ所々を建て迎年祭禁め再び
人民安堵の思いをなせり而に今年ひろまりて石魂生きて障碍を
あす國中他国の人まで往来の人を害して諸人をうばまた
ゑ禍日既に及ぶ頃ろ形須八郎宗重方より南時乃
執政左大臣藤原公能卿に注進の書を差げ彼家の書記大蔵丞
お補利孝簑殿内義政昌行まで花卿を呪れば藤原公能
搖戸ま安倍泰親を召て かゝる変事如何ぞ占へ泰
俊法師あゝ ぞんい叶へ沢先年の沢事も くゝ 俊法師

大切感じ あるべし去ぬ今年みして手腕もむりに
遠い若宮家一人まで拘ゆ 俊法師あれば泰親去
たゝて崇命違でありまする来年つゝて七十三歳以来
分躰おゝ ゝ 風い健よして行時も天皇以忠邦仕
いんを弓式いとひ べき国土の為民のうれひをのぞんとえう
頼人而之勅命ぞにゝ ゝ 唯今ゆても数日 石魂殺ぶ
発ゝ 出安倍泰俊 ゝ まゝ せんと 藤忠重 ゝ れて 殺
けゝ ゝで頼長公大に感じ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ 方山の
山物殺ゝ 何をうゝて退 ゝ けりゝて泰親禁中にめされ
下神國形須神の怪石魂人をなやまいの源ゝ ゝ


左大臣頼長公
泰親を召し囚ず



下句の一石碩式きづむべき勅命あり是まで位階四位官位侍従
小弼り播磨ちいえのどく蒙こまし式此度従二位に叙せられ
けり恭親勅旋の旋てなどかく畏きのむ位階四位さんさく
下野國より下句の一家秘の御法式ありしの恵石の四面に
墳式ゆしいさせ杉又迎づく王禁制の札式うて往来乃旅人
他國のこのゆもきりめ恭親い上糸四旋より新しるいそどね
旅の色も悠よ下くの名石四辺ども式世り新の古意にせどやと
寄枕をうるゆして西白うは旅の空行なく四旋いしく考ゆ
ありられば感感海くうび恐賞式下しのし正四位上るあ一
下され毎度の誠勅恭親名式かどやしし後宮式孫さきいる

そもく此恭親ちゆい考元帝の前齋尤大臣倉橋麿九代天文
博士月天筭術の長従四位下大膳大夫晴明より六代ゆり父ハ
恭長して早世一迫又い従四位下有行といて恭親幼年より
天文ト道の家式相續し一ちを弼麿一頗温奥式きうい
たり保安年中清涼殿ゆ槽式ゆ出怪平金式祈て玉藻の
前ゆ障碍式除しハ四十一年の時ゆりしとやそて孫繁蔭て
今の古御門家ゆ出相續す一海式滅ゆ帝代の名家こ古祖に
下野國住人形須八郎宗重ハ毎度朝廷の出恵ゆ一形
須狐の妖怪をきづ先須内の静謐ゆ民家業式安んぜ
と莫大の天恩謝一ゆ一ちびあ一ゆ一ちびく出て上海一

恭親
石魂を
鎮め
帰洛の
図

左大臣相公の後よ何そし傳て禮謝し恭親まを面謁して
毎度の勅使謝し却よ執奏年して翌年帰國かしりの時に
今上迦陵院法皇十四年久壽二年七月廿三日御壽十七歳
ゆして崩御まし給ふて多羽法皇第四の皇子迦陵帝の
雅仁親王位を踐のし出家信を聖年改えありて保元元
丙子年より後白河院と奉る人皇なり法典崇德院法皇
配なり今年七月二日多羽法皇崩御出家五十四歳の年の
秋八郎宗重相須の領地よりあく病死し其子那須与市
宗高家督お續し弓馬よ達し名誉武後代よ滅せし
勢ひに年より四十つまどもの石魂猪人よ害ぜうの法中

さらに出ばを求ることを禁制せんとて書歌迎ふんて昇死し
京武翔り地よ奮る多郎る武死をづけて怨死し
彼石のわるり小禽獸の繁るとし山のどうして殺生石と隨
とやさられば山石のやうり湧出るあるし生信ぜうえま
あるれいあるれして満を川よ落入る川よりて奥あまとも
彼多蔵入て流るよい魚中毒毒あるの死るや滅す
帝有の恐獸石と成て怪怨念魅惑ぜ滅りしくも
又あるるして山物を世の中大よ乱を朝廷来多く
國し変りて合戦止ることを不うりれば余義形くもそ
歩拾をれしぐるる年代伸て仁安赤恵義安の法迦と朝廷

禽獣
殺生石の
毒に斃る
号

の山沐浴して金藏院の僧侶成野別所須弥壇にて
殺生石の怨恨を書作し概略成とむべき勅命ありけれ
ば紀伊國紀三井寺の淨恵と云て博学多識の学僧
有德帝なる僧侶ありけるが朝廷小巻一部須弥壇より石魂
を表作せんとて かの石の下り九二町斗も奥ゆき経文讀誦し
おごり沈寂を迎くようと せ給ひ石の下りうの半ばに風やや
て 牙にあらくしく ゆ ゆ が 長 せ 給 ひ 数 人 忽 毒 にあうこと
即死を淨恵是成 又 て ちぐらさ ず し む 而 よ ふ こ び
悪風ふきうけ 紙 ま た き れ て 死 し ま る 其 後 播 州 四 書 写
山の下空坊よりつる世ふ も ち ま る 多 識 院 の 名 僧 この

こと紙ゆつきん朝廷より巻一部須弥壇に下り殺生石成 表 化 浮 狂 ゆ
さしめんと 三 度 に 石 の 下 り う 毒 風 ふ り ふ ま ま り
あれ ば ち れ も た ま り ば ば 空 亡 ゆ る 人 咲 た を さ れ て 師 弟
三人 世中の 者 と 消 う せ り 又 こ 後 さ る か 年 孫 て 紀 和
国真静寺の僧 る 乃 基 阿 舎 利 と て 乃 徳 そ ぐ れ 悟 る 秀 少
の名僧 こ れ 又 ま る 中 ま ま 巻 中 を 極 く 殊 別 よ り む き 彼 毒
石の怨恨を解脱せ 給 ひ 後 素 の 害 成 ち ぐ め 禽 獣 の 引 を 救
乃 と 思 い 立 て 弟 子 四 人 を 引 き 拔 よ の ぼ り 許 容 成 ら ま て
形須弥壇に下り 師 弟 五 人 僧 徳 志 ぐ ら 限 く 殺 生 石 に を
ら り け ふ ま り ひ も ら ば 石 の 毒 ら 風 ふ ま 咲 生 り そ 身 よ

殺生石
教化の
僧侶

あるとき記しく所労ありて毒薬を服して死しぬるまさるにうつて世に殺生石の恨魂を教化し給ひめんとおもふ僧侶もあまたびの数十年の星霜を経るうちに今ハ世の人知ることなく知るところ禁制のれなくても迎ふる者えあるざれがあやまちなりとしても禽獣草木にも命ありこれを殺すべからず石面苦むして悔ゆい

世ぬるとこれありさるもの

玄翁殺生石教化図 養和元年三月廿二の皇子まします

春宮養和元年云年改て人王八十代後深草院所尊い久仁法皇院

の治世建長年中 時の摂政 近衛兼経 武将 鎌倉の征夷大将軍

宗尊親王の古源世少家氏正義 相模守 相模の守 相模の守 相模の国

牧も是重武 武 武 相模守の毒石の害止りしかで主上ふく雲震襟悩し給

のゆ宣旨 播州法華寺の住僧玄翁和尚一説に源翁と云せり 紙 おもの 玄翁

秀才 知識 悟 の ゆ 世ふるしりしかでかの 後 京師 石 殺生

石 教化 得 祝 ふ 勅命 あ れば 畏て 法 法 僧 の 名 れ

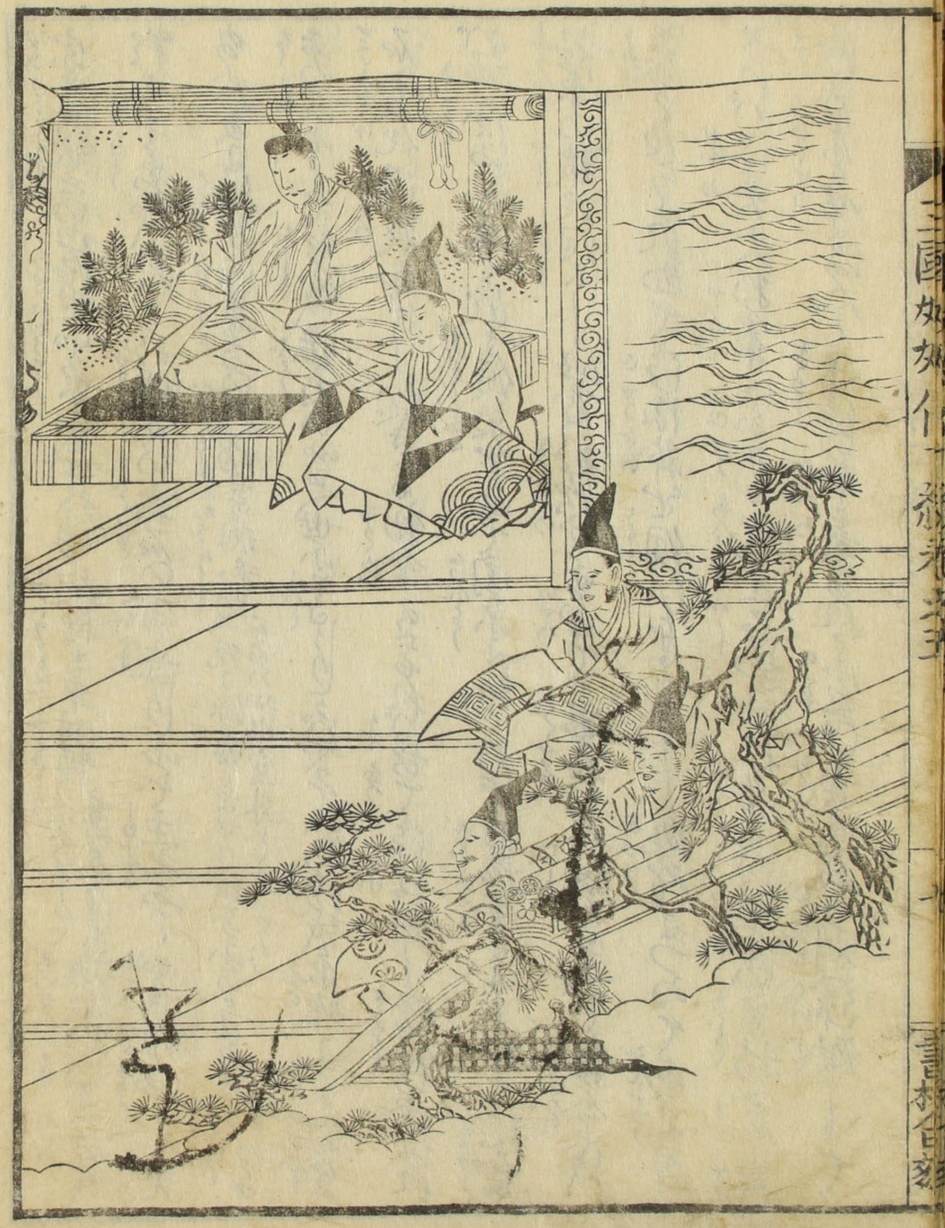
ば 帰 ふ る 乃 ち 庭 を 立 て 関 東 の 諸 乃 中 相 模 ま ま し か り 後 会

将軍の 紙 に 何 し 賞 彩 源 ふ て 毒 石 を 化 度 生 ぎ 勅 命 成

夢 こ れ 出 て 法 祝 神 を 何 ひ ま ま し 物 怪 よ つ て 云 こ と

それ ば 伝 夫 大 将 軍 宗 る 祝 こ 石 ま れ 乃 毒 の 知 識 家 特 こ れ 生

源 義 本 石 よ り 人 て 僧 侶 の 本 言 ま れ と 宣 ひ 奏 考 あ り 則 法 御 し て



玄公和尚
鎌倉將軍家に
見參の
圖

源金を立出ずるに僕も昌ぶ只一人綿服に麻布の三衣を掛る
を携たる忽然をつまづき茅蘚げみ枯草の旅やうく下野国にたどりつき
那須郡にて加の数に石の幸くうり種文殊通あるべく辺づさうきば
石の下なる古祠くとに忽妖風烈く吹来て一歩のもあるむべくして
身を掃よそむけ掛るを打ふり風せるけ大業妙典をうるるみりけく
をづさくれば不思議や忽せ〳〵石服あるもずべく小蛇烈破れ
ぶれて荒和布のごくふなりけるとも身ふハさ毒あく〳〵
ざらぬ〳〵邪なく石の側よりうて経文唱〳〵かりて報る歌に
一切衆生悉有仏性如来と説のし草木国土悉皆成仏とも又
きび本石ものとゝるえ来仏体具足せりうんや大業

妙典の功力よりくび成仏うるべしあるべくば石面にむかひ我今
汝に一句示さん

噫石霊石霊
執魂無所帰
魔則有法濟
即今汝念底

鷲風ちびくあるり蓋やうぐ河ふふ〳〵ぎやかの大石ゆ〳〵
揺ゆるゆ〳〵が其精忽然として二八あまりの女性く現を出現
錦繡の衣つ鬱る紬の袴丈にる玉鬘うるしく檜扇を負に
たづさへ立るるるに風ひ朔延みて玉藻前くめされ河の梁みて
微る天降まる天人もかくやうぐ雲霞ぐ〳〵貝に
又〳〵弟る鬼を数たくいるる悟りの名僧ありとも心まるひ

わきぐとあるぐさ艶色媚ぜりつてたぐ〳〵さんと斗きぐも玄翁和
尚も多識正覚の碩徳いうんを知らぐさるべき言葉に汝元来
教生石為ぜ解ざるが如くに物ぜ離れば佛性を具ぐ
ぐんを為業ぜ積で百千劫の苦ぜ求ぐや急〳〵に去き急〳〵
にされ女がいつく居悪不二と学うゝ垂量劫も我物会ら止む
ぬ〳〵ぜ雲霧晴一時〳〵ていう〳〵息ゆん〳〵為性一致と説べ
頻怪昂菩提為ぜが如くに三界せ年〳〵悟〳〵ぜ十方ぐ
再び一句ぜ示さん諦聴せよ〳〵

人畜悉皆宇宙塵　端的不逢劫外春
本来面目有何處　無位心印磨不磷

如き此河合掌して我今生で生ぐり死ぐり三千世界を驚界よ
あさんとそもそもまぐ僧の義化よりて逝に浮説せぐ今ら何
をうつむべき我生元来人にわ〳〵び乾坤寂寥の河よわ〳〵ん〳〵
陰〳〵ぐる濁世の凝ぐる和形ぜ物よ悪ぐ数千万の果を現を弱
て学じて白面金毛九尾ぐぐり大唐よあつて殷の紂王乃
后妲己とあつて彼ぜ傾国よせんとぐぐ国に大ぜ望ふ害せ〳〵を
ふ〳〵び其姿形ぜ〳〵天竺よつく渡ぐ足ぐ〳〵ぜ再び
周の幽王の妃褒姒と現じて周室を傾ぐ吉備ぜ入唐阿倍
の船よ便て日本に渡り潜隠れて何ぜ結ぐ玉藻前と現て
鳥羽院の玉躰よ取ぐ呪術よ傳せ〳〵を遠〳〵ぜ

玄翁石魂を化度する図

井に隠れしより三浦介上総介が矢先より命をおしむとも一条の
怨魂いかんぞ消せん毒石となりて人民多数を害し又ハ河
海ハ日本国も傾くと衆星和尚の海邇より深く悪
念魔障に解脱せるこの姫しさまとしつゝ思ひ女性乃深き
煙のごとく消えるもかり玄翁和尚も毒殺ふりあげ阿耨多羅三
藐三菩提石より精あり水より音あり風なき虚空よりこゑ唱し叱
して教生石ぞくとゝ打てびゝゝびゝゝや苦しゝる大石ゝる
ゝ一条の白氣立のぼり碎し石の細かなる紙更く面のごとく
消滅せるこゝ出けるに玄翁もこれを碎け給ふる石ぞかつて
地獄菩薩のごとく像ぞ彫深倉にたづさへまて帰れしが

そこに執権小泉相模守入道平高時没後の孫を利将軍
義満公に地獄ぞ所よりの使者神楽岡吉如堂に安置
ゆゑ今ハ移りて将軍地蔵と称し奉る
あるゝ時諸人気色を訪て玄翁和尚に大叡
法翁禅師の号ぞ給ひしとや玄翁和尚ハ土上の法感斜和尚の
七大寺院の一宇ぞ建立
二月七日播州護国寺にて七十余歳にて遷化
又百二十五年小原ぞり 抜玄翁毒石仏変の河原中より高のやり氣ハ長門国
薪の城下より七里ヶ浜よりこゝ出ぞ歩けるを地獄
里人神ぞ祭り五輪大明神と号社を造営し毎年九月廿八日祭礼

美作國
高田の庄
玉藻大權現
祭礼の
図

玉藻大權現御

行ものや又蓮につまんでぶけ石の蓮花の花ハ是石の図言図の表と
いふる処より蓮花神ましまつり玉藻大権現と崇め宮
居の面に鏡形結ひ人をのびび多勢をあつまり
翁あでやかつて玉垣の内より入まゐ見坂槍ぶるいつり
別当い禅宗ふて玉藻山化生寺と号し例年九月廿一日
祭礼あり山時別当の長老ゆけ寺丈ぐり厨子と見え
しく錦につゝまれ神体ようて神鏡ようてゆび神鏡像ぐ
ちれと神輿ふおさむ是より宮に神ぐるく祭礼の時ぐり
外ようたのむとく是皆眼病ぐ和ようる人の祈願あり又毋別
那須郡の原に磨し石ゝ今も柱苔ふく垣ひまい

人民の害ようとゝ農夫牧童彼石の邊ふ行てすし石
上をとゝりくる風あるとゝ化ゝ公地怪ゝとあるとゝぞさしも
妖毒の害あるし殘章今ハ存ようとゝ是又其里人乃直説
なり又今の世に石工の石を穿つ洪器ハ玉翁の名あるゝ
かゝる石紙破碎く縁ハ号けしゝりをゝ有名く書函の
風る器ハも此名あるとも也去ふても玉翁和尚廣大の法徳
にまつてかゝる石魂の怨念を解脱ようとゝめ後代まで諸人の
愁を除さあまりさく毒石害ぐて利益ある神社となりし
第代未聞の傳記紙面畫図紙爰て婦女子の耳目紙歴世
む貴賤美色に公紙蕩ようとゝの家紙ようしあひ身と亡ま

と古代のうにわゝぶ今来の美人たゝく甚性妖婦の変ぜるに
わゝぶも男子昏惑せび行ぐ妖婦わゝぶとせんとれを懲
らしてかゝ脩身教家の習もなゝび害懲の誡も咎なき
ふゝもわゝぶうもと弥辯じて筆誠らしめ

繪本三國妖婦傳下編卷之五大尾

京　堀川通高辻上ル町　植村藤右衛門
大坂　心斎橋筋安堂寺町　大野木市兵衛
文化二乙丑年正月
江戸　麹町平川丁二丁目　角丸屋甚助
東叡山林鹿下谷町　花屋久治郎
下谷御成小路　柏屋忠七
四谷伝馬丁二丁目　住吉屋政五郎